

Title	相互書評: 中筋由紀子著 『死の文化の比較社会学: 「わたしの死」の成立』 梓出版、2006年
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.93- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相互書評：中筋 由紀子著

『死の文化の比較社会学——「わたしの死」の成立』梓出版社、2006年

澤井 敦

「死の社会学」が社会学の一領域として日本でひろく意識されるようになったひとつのきっかけは、2001年の、副田義也（編）『死の社会学』（岩波書店）の出版であったと思う。がん告知、死別、被災体験、自死、葬儀など多彩なテーマをめぐる経験的研究を集めたこの書は、この領域の豊かな可能性を示すものであった。と同時に、この書の「おわりに」で副田氏が今後の課題のひとつとして言及されていたのが「死の社会学史」あるいは「死の社会学理論」の構築である。拙著『死と死別の社会学——社会理論からの接近』（2005年、青弓社）も、こうした課題を意識したものであった。そして、拙著発刊のおよそ3ヶ月後、日本社会の「死の文化」を読み解くための理論的構図を提起する書として現れたのが本書である。今回、『三田社会学』誌上において「相互書評」といういささか異例の形をお願いしたのは、出版時期が近接していたことにも増して、その問題意識が交差する地点で、「対話としての書評」をつうじて、興味深い知見が引きだされるのではないかと感じたからである。

とはいえ、拙著が近代社会全般を対象とするものであるのと異なり、本書は、日本社会の特徴を、比較社会的に、理論的かつ経験的に考察する試みである。

本書の価値は、第一に、現代日本における死の文化の特徴、つまり、著者のいう「わたしの死」の成立以降、「個の自由の成立と、その存立の周囲への依存による不安との狭間」（257頁）にあって揺らぐ関係性の特徴を、説得力ある筆致で的確に描き出したという点にある。著者は、柳田国男、有賀喜左衛門といった先達の先祖祭祀論を丹念におさえたうえで、高度経済成長期以降、とりわけ1990年代に顕著となる新しい死の様相を、東京都中野区の寺院や寺院檀家へのインタビュー調査、「もやいの会」や「葬送の自由をすすめる会」といった新しい死のかたちを提唱する代表的なNPOの会報分析や会員へのインタビュー調査などを素材として論じていく。とりわけ後者の調査の分析をつうじて著者は、「わたしの死」を私的な親密圏の情緒的絆のなかに位置づけようとする現代日本の死のかたちを「〈我々〉の一員としての死」として概念化する。この類型をめぐる著者の記述は、「もやいの会」と「葬送の自由をすすめる会」の微妙な差異をも含み込んだかたちで、死をめぐる現代日本の関係性の様相をきわめて繊細にとらえるものとなっており、評者としても学ぶところ大きかった。今後、日本社会の死に関する社会的な研究を進めるうえでの、ひとつの堅固な準拠点となる成果と感じた。

また第二に、本書の価値としてあげられるのが、上述の「〈我々の一員〉としての死」という現代日本の類型の特徴を、比較社会的考察をつうじてより鮮明に浮かび上がらせているという点である。著者は、東南アジアのイバン族やアフリカのヌアー族といった未開民族にみら

れる「共同体における死」、伝統中国、漢民族の死の儀礼や風水思想にみられる「系譜の連続性の中の死」、現代アメリカの商業化された葬儀や墓地にみられる「かけがえのない個人の死」という三つの類型を具体的な資料や調査から導き出す。そして、これらの概念との相互比較のもとに、現代日本の特徴が 4 象限の図式のなかでクリアに纏められて本書の議論は閉じられている。ここで著者は、一般に死の「共同性」として論じられることの多い現象を、「共同体における死」、「系譜の連続性の中の死」、そして「〈我々の一員〉としての死」という三つの概念に区分し内容を細分化してとらえており、このような比較社会的な概念化も示唆するところ大きいと感じた。

さて、以上のような本書の重要性をふまえたうえで、以下において四つの論点を提示したい。これらは基本的に、本書の内容について細かな疑問を問うというよりはむしろ、少しだけ距離をおいた地点から、死の社会学全般にも関わる問題について、著者の考えを尋ねるという趣旨のものである。

①**死の問題と死後の問題** まず著者が「死の文化」を「葬送儀礼と墓地祭祀」に限定して考えているという点である。英語圏において、「死の社会学」は“Sociology of Death and Bereavement”や“Sociology of Death, Dying and Disposal”などと称されることも少なくない。つまり、死ぬまで生きる (Dying) という側面に関わる問題や、遺された者の死別 (Bereavement) という側面に関わる問題などもまた、死の社会学の対象であり、また同じくその具体的様相は背景とする「死の文化」によって変化するはずのものである。もちろん、筆者が言うように、「死という出来事や死者自体は見えない何かであるから、そうした (葬送) 儀礼の営みや墓地の具体的な形態こそが、人々の死に関する観念や死者をめぐる想像力を規定する力を持つと考えられる」(70 頁、カッコ内筆者) ことはたしかであるが、「死の文化」はそこに限定してのみ考えるものだろうか。おそらく著者も、そうは考えていないだろうと評者は思う。ただ、とりわけ著者が照準を合わせているのが儀礼や祭祀の民俗学的・宗教学的な詳細というよりは、むしろ、それをつうじてあらわれる社会的な関係性のあり方であるだけに、この点についての補足的説明がほしいように思った。

②**空間的な比較と時間軸上の変化** 四つの死の文化の類型を、空間的に、4 象限に位置づけることによって各々の特徴が明確に浮かび上がると裏腹に、それら 4 象限間に存在する時間軸上の相互連関が見えにくくなっているのではないか、という点である。おそらくこれも、著者としては充分わかったうえでこのまとめ方を選択している、ということであると評者は思うし、その成果も先に述べたとおりである。ただあえて言えば、たとえば、「過去」の日本の死の文化について、である。著者がいう「〈我々〉の一員の死」は「現代」日本についての類型であり、それは、高度経済成長期以降徐々に形をなし 1990 年代以降、多様なかたちで顕在化したものと考えてよいだろう。ただ、柳田や有賀がそれ以前のものとして描いた日本の死の文化は、類型的にはむしろ「共同体における死」に近いものではないだろうか。この点については第一章「共同体における死」の第一節「比較についての予備的考察」において言及がなされ

ているともとれるが、位置づけがもうひとつ不明瞭であると感じる。また、「〈我々〉の一員の死」の特徴のひとつである「わたしの死」の成立は、大きな潮流としてみれば、アメリカにおける「かけがえのない個人の死」という考え方に影響を受けて成立したものと考えられないだろうか（もちろんこれは、葬送や墓地の問題においてよりも、終末期医療や死別の問題においてははるかに顕著にみてとれるものであると思うが）。あるいは、もう少しひろい視野でみても、「わたしの死」は、近代化や都市化の影響の結果として現れてくるものであろう。だとすれば、「〈我々〉の一員の死」の図式的位置づけの際に言及される、生者が「私の死」の充実を望むという意味での「生者の優越」と、その実現が周囲の成員との関係性に依存するという意味での「独立性がない」という二つの特徴も、空間的に並列されるというよりは、むしろ、もともと「独立性がない」という土壌をもつ文化において「生者の優越」という傾向が次第に強くなる（あるいは流入した）結果現れたというように、時間軸上の変化としてとらえられるのではないだろうか。

③無縁と不安 著者は本書の冒頭において、「現代日本における死の文化」が『わたしの死後』無縁仏となることへの不安や孤独の心情」という「困難」に立ち至ったものと考え、それが生起する「文化的なコンテクスト」を考察すると述べる（i 頁）。この無縁という問題は、「現代において全ての人々が潜在的に共有する問題」（46 頁）であるともされ、それはまた、『わたしの』死後を安心して任せることのできるような誰かを、見いだせないかも知れない、という問題」（204 頁）とも述べられる。先の①と連動する論点であるが、「葬儀や墓地」の問題に関する限り、たしかにそうであろうと思う。ただ、この無縁という問題がどれだけ一般的に「問題」として感じられているのか、また、人々が死の不安や恐怖を感じるとして、それはこの無縁ということを主要な源泉とするのか、といった点について、さらなる考察の余地があると思う。たとえば、著者がこの問題を論じる際に言及する「もやいの会」や「葬送の自由をすすめる会」の人々の言説は、著者の言葉で言えば、「新しい死のあり方を求める運動に参加する人々が語る言葉」（5 頁）である。したがって、相対的にかなり積極的に自らの死後の問題について考えている人々の言説ということになる。寺院の檀家としての自意識をもっている人々も、通常よりこうした問題について考える機会を多く持つ人々であろう。逆に言えば、このような運動に関わってもいなければ檀家でもない少なからぬ人々にとって、こうした問題は、普段はあまり気にもとめないし、かりに問題になっても成り行きまかせですましてしまうようなものにすぎない、ということはないだろうか。また、死の不安や恐怖に関しても、より一般的な文脈において言えば、葬儀や墓地に関して無縁になるという不安や恐怖よりも、むしろもっと漠然とした、得体の知れない不安として感知されることが多くなっているように思う。2～3割の若者は死んだ人が生き返ると思っているという近年の意識調査の結果がいくつかあるが、言い換えれば、絶対的な虚無としての死への恐怖や、不可逆の断絶や孤独としての死への不安がリアルなものとして感知されにくい状況が、近年生成しつつあるように思う。

④解放と治療 最後にやはり、著者の根本的な（実存的な、と言ってもよいかもしれない）

意図について尋ねたい。評者自身はといえば、社会学的研究の根底に研究者のなんらかの明確な実存的・実践的な意図があるべきだ、あるいは逆にそうした意図から中立であるべきだ、といった「べき」論自体から自由な場所に立てれば、と思っている。ただ、先達たる見田宗介氏の比較社会学が解放的意図に根ざすものであったことを思う時、著者の立ち位置はではどうなのだろうと興味がわく、ということである。著者は、「本書の課題の一つは、この『わたしの死』の成立、すなわち、『わたしの死』こそが、死の恐怖の根元である、という捉え方の相対化である」(i 頁)と述べている。著者は、資本主義的経済を基盤とする社会の「本来的な未来志向」(177 頁)が、「過去や死者の領域」が「成立し得ない」社会をうみだし、さらに、未来の死への恐怖をうみだし、そしてまたその恐怖が「個人化された語り」においてしか意味づけられない状況をうみだすとする。そして、比較文化的な手法は、我々がとらえられているこうした社会的文脈を理解する有効な方法であるとされる。このような志向は、現状の相対化とそこからの解放という意図を宿すものともとれる。しかしまた他方、著者は、比較という方法を「自文化を強く批判するために用いているわけではない」(ii 頁)とも述べる。むしろ、比較という視点は、「違っていることがおもしろい、という単純な関心に基づいている」(iii 頁)とも述べられる。ここでみられる著者の意図が、現状を批判し処方箋を提示することではなく、現状を相対化し新たな視野を得る可能性を開くことであるとしても、評者はそれでよいと思う。ただ、著者が A. クラインマンの言を引きながら、このような営為の「治療的意味」にふれる時、相対化という地点から一步踏み出そうとする意図を感じるのもまた事実である。

端的に言えば、現代日本の死の文化である「〈我々〉の一員としての死」について、筆者はどうか評価しているのか、ということである。「〈我々〉の一員としての死」は、相対化しそこから距離をとるべき文化的コンテクストなのだろうか。それともそこには、相対化したうえで、そこにもう一度回帰し、肯定し汲み取られるべき要素が含まれているのだろうか。著者の議論から、後者の示唆をもまた評者は感じた。ただ同時に、様々な問題をも感じた。たとえば、「もやいの会」に見られるような共同墓は、現在では一般的なものとなり、永代供養墓を持つ寺院ももはや珍しくはなく、公営墓地でも小平霊園のように共同墓を持つものがある。こうした例では、かたちの上では共同墓という点で共通していても、「もやいの会」のような関係性がそれを基に成立しているか、というと、そういうわけでは必ずしもない。また、「葬送の自由をすすめる会」は、著者も述べているように「運動の社会的認知」を求める団体であり、そういう意味では、外部批判的傾向の強い団体であると思う(だから悪いということではないが)。評者の知る限り、同じ自然葬というかたちをとるにしても、それが葬儀屋のサービスのひとつのオプションとされることに会は批判的であるし、また、樹木葬のような、従来型の寺院が所有する山野の樹木の下に葬送するかたちにも批判的である。要するに、「もやいの会」や「葬送の自由をすすめる会」のような新しい死のかたちを求める運動にも、様々な側面があり、それぞれの側面について著者はどのように判断しているのだろうか、ということなのであるが、興味のあるところである。

[本体価格 3,990 円]

(さわい あつし 慶應義塾大学法学部)